



がんちゃんJr.防災リーダー養成講座2020を開催しました

9月17日(木)に盛岡市立上田中学校にて「がんちゃんJr.防災リーダー養成講座2020」を開催しました。本講座は岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センターと岩手大学地域防災研究センターの共催によるもので、教育実践・学校安全学研究開発センター設立前の2017年度より上田中学校における「いわての復興教育」の一環として全学年を対象として開催してきました。

今年度は新型コロナウイルスの影響により、3年生のみを対象としてDIG(図上災害訓練)を実施しました。講座の実施にあたっては、講座開始時や講座の途中で適宜手指消毒を行うとともに、グループワークではなく個人作業を中心とすることで感染対策を重視して実施しました。



DIGとはDisaster(災害)、Imagination(想像力)、Game(ゲーム)の略称で、地図を使って防災対策を検討する訓練です。DIGを通じて「災害を知る」、「まちを知る」、「人を知る」ことで、自然災害発生時の被害を少しでも少なくして自分の命を自分で守れる力を身に付けるとともに、助けを必要としている人を知っておくことで共助の力を高めることを目的としています。今回は身近な地域である上田中学校周辺の地図を用いて、地域の特徴や災害発生時の強みや課題に気づき、地域に対する理解を深めました。講座ではおよそ8人が一つの班となって上田中学校周辺の地図に事前課題の成果を反映させ、出来上がった地図をもとに地域の特徴等について検討しました。

同じ課題に取り組んでも各班の成果や気づきは様々で、まとめの発表では「病院や大学といった公共施設が多い」といった地域の特徴に加え、「寺院が多い地域では地震や火災が発生したら危険」、「ここは避難所に指定されているのに防災マップでは浸水想定区域に入っている」といった災害時に自分を守る行動につながる発見もありました。

自然災害がいつ発生するかは誰も予測できないため、コロナ禍にあっても自分の命を自分で守れるようになるための実践的な学びが求められます。例年とは異なる環境と方法での実施となりましたが、今年度の成果と課題を丁寧に整理して今後の改善につなげていきます。

仁王小・上田小学習支援ボランティア活動が始動します

8月31日(月)に盛岡市立仁王小学校及び上田小学校への学習支援ボランティア希望者への事前指導を行いました。事前指導では本センターの仁昌寺客員教授および菊地准教授がコロナ禍における学習支援ボランティアの意義やボランティアに向かう際の心得等について学生に指導しました。今後は両校からの要請に応じて、1年生から4年生まで60名の学生が子どもの学習を支えるボランティアとして活動します。

ボランティアの実施にあたっては新型コロナウイルス感染症の拡大防止に細心の注意を払い、両校に非接触型の体温計を設置し、学生に検温を課しています。

また、学習支援ボランティア活動は本センターの実践的研究課題として、小学校に対する効果や教員を目指す学生にとっての効果について継続的に検証してまいります。

学生、そして小学校の子ども達、双方にとって、この学習支援ボランティア活動は、たいへん意義ある取組になると考えています。小学校教育の実際を、直接、自分の目で見、肌で感じる体験はたいへん貴重なものになるでしょう。一方、小学校の子ども達にとっても、学生による支援一つ一つが、子ども一人一人の可能性の開発に大きくつながっていくものと考えています。この学習支援ボランティア活動が、どんな教育効果を生むか、とても楽しみでなりません。



災害から児童・生徒の身を守ることは社会全体の使命である。学校を舞台としてこのことを実現するためには、3つの力が備わっていることが不可欠と考える。3つの力は、①科学の力と、②地域の力と、③学校の力である。3つの力が発揮される条件を整備しつつ災害に備えることが、災害で命が損なわれないことにつながる。

3つのうち第1は「科学の力」である。児童・生徒の資質・能力を高めるための科学的に知識の応用という次元と、全体社会レベルでの科学的知見に基づく防災対策という次元が含まれる。

多くの災害はおおかたは予測が可能で、それゆえ事前の備えが結果を大きく左右する。特に、国家レベルの対策が求められる。被害を大きくするのは、社会の脆弱性が放置されているからである。脆弱性を克服するための科学研究に基づく対策が実施され、①ハードや、②まちづくりや、③ソフトの面において備えができていなければならない。防災に関する政策権限を握っている政治家や、各種分野で研究を遂行する立場にある私たち科学者もみな、重責を果たす立場にある。

学校現場では、専門家を呼んで講演会を開いたり、画一的な災害対応マニュアルを配ったりするだけでは足りない。科学的な知見を基に、児童・生徒目線で、実践的に学習や訓練を取り入れるかどうか問われる。

第2は「地域の力」である。災害にとどまらず各種の学校安全対策において、地域社会と学校の連携は不可欠である。こうした連携により構築された力が、いざという時に力を発揮する。災害は地域社会を包括する範囲で起こり、各種の災害リスクは地域社会の自然的、社会的特性と密接に結びついている。このため、学校をとりまく地域社会がどのような災害の歴史の中にあるのかを知る必要があり、また災害の歴史とともに構築されてきた地域の災害文化から学ぶ必要がある。

地域社会の中では、しばしば自主防災計画が作られ、地域社会の多様な担い手が災害時に連動する体制が組み立てられている。地域の歴史と文化の活用および、多様な担い手との連携を通じて、災害時に地域の力が発揮されるのである。

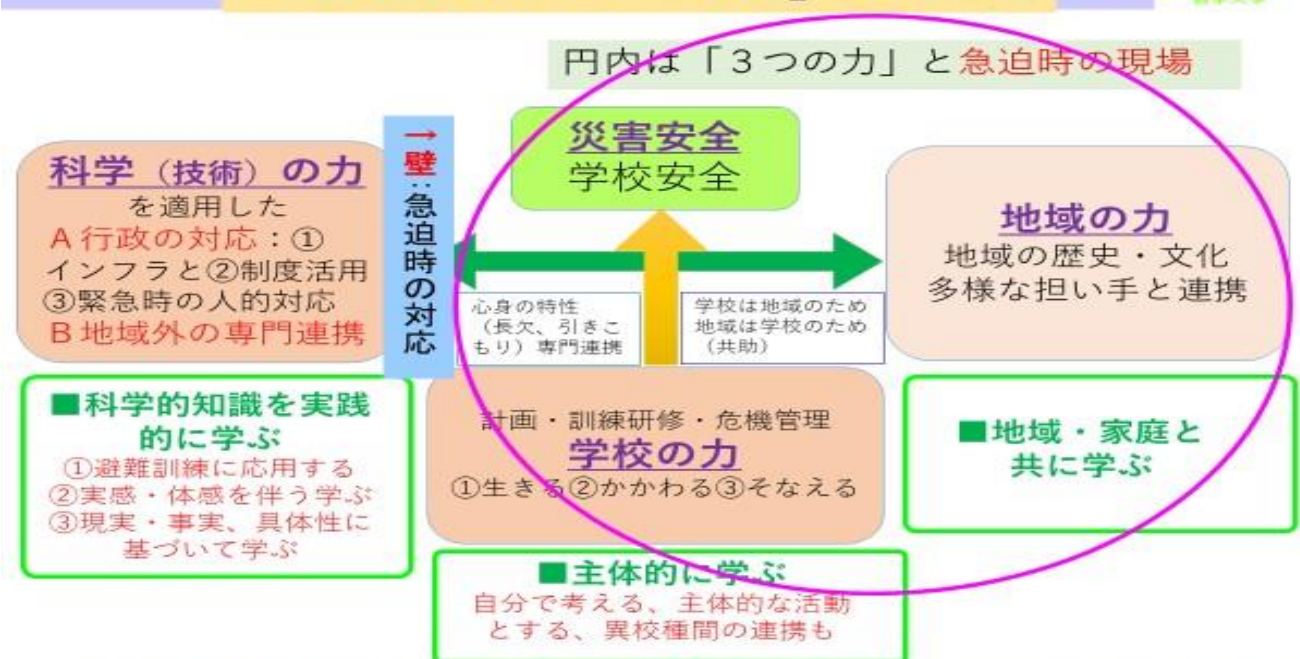
最後に「学校の力」である。学校は公立小学校などを例にとれば、地域社会の活動の拠点であり、災害時には公設の避難所となるのが通例である。科学を教育に応用し、地域社会からの学びを取り入れるのも学校である。他方で学校は、公助の担い手の重要な一角を占めるという特別な位置にある。地域防災というと、共助と自助が強調される。しかし、公助としての学校の力は、地域コミュニティの核をなすという重要な使命を帯びている。防災のための各種インフラの整備や国土計画に基づく均衡ある発展などの総合的な対策、そして消防・警察・自衛隊などの緊急対応ばかりが公助ではないことは、地域社会に根差した学校の存在の重みを通じて再確認されるのである。

図は、森本晋也(文部科学省、岩手大学地域防災研究センター)と釜石東中学校の取り組みをベースに防災教育の「3つの力」を絡めた図式である。「学校の力」は学校内部の対応のみならず、地域社会と密接にかかわるという面と、科学的知識の応用という面を持つ。学校が担う公共の位置づけを弱めてはならない。

参考文献

- 森本晋也・土屋直人「震災を生き抜いた子どもたちが学んだ津波の歴史と防災—地域に学ぶ教育実践の記録—釜石東中学校(1) —」『岩手大学大学院教育学研究科研究年報』第1巻、95-113頁、2017年3月
 麦倉哲、七木田俊、菊地洋「岩手大学教育学部の強み・特色づくり事業～教員養成・教員研修の充実・発展に向けた「学校安全学」の構築～」『教育実践研究論文集』第7巻、103-108頁、2020年3月

防災教育と「3つの力」の関係図



現代に潜む危機→

↑▲：学校統廃合問題 ↑▲：人口減による人の配置

2021年3月11日に東日本大震災から10年を迎えます。当時を振り返り後世に語り継ぐべきあの日、の教訓や、教育との関連であの日から考え続けてきたことについて、教育学研究科及び教育学部の教職員による連載を開始します。

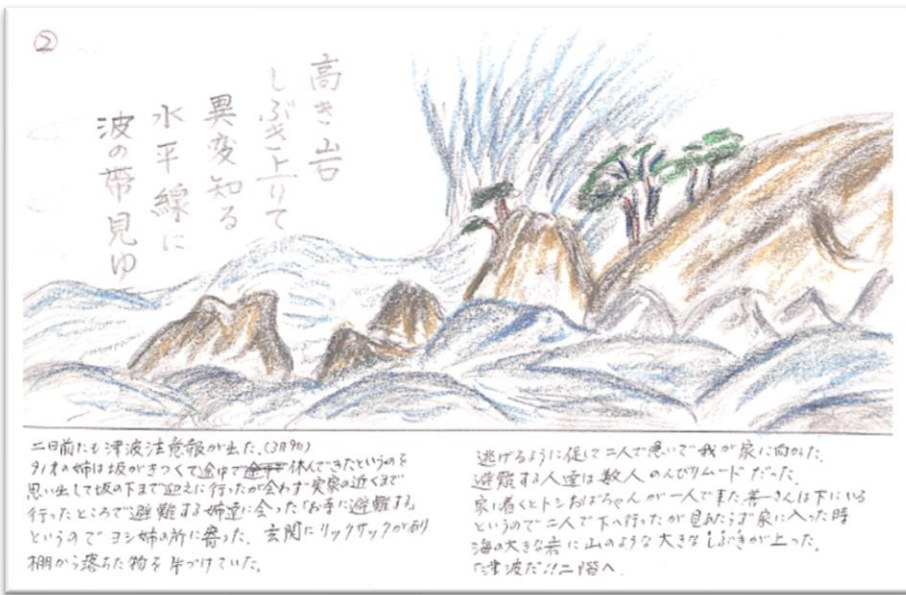
東日本大震災に想う

教育学研究科 特命教授 東 信之

平成23年3月11日午後2時46分。あの時、私は一関清明支援学校あすなる分教室の卒業式で卒業証書を生徒一人ひとりに渡し、最後の校歌を歌うところでした。大きな揺れと同時に、会場の国立岩手病院のホールの天井からは大量の白い粉(ほこり?)が激しく舞い降り、その中を車いすに座っている生徒や保護者を校庭に誘導。避難直後、目の前にあるショッピングセンターの大きな看板がゆっくりと傾く情景を、まるで映画の一シーンのように見っていました。

あの日より前の3月3日。本校舎体育館で行われた全校朝会で、私は『3月3日は、皆さんにとっては「ひな祭り」ですが、校長先生にとっては、お祖母さんが両足に傷を負い亡くなった日です。昭和8年3月3日、大きな津波が沿岸、田老を襲いました。波と言っても高さはこの体育館と同じ高さの大きな壁のような波です。お祖母さんは、その津波の風圧で壊され、飛んできたトタン屋根で、両足を切断し、亡くなりました。』と津波の恐ろしさを話した矢先でした。

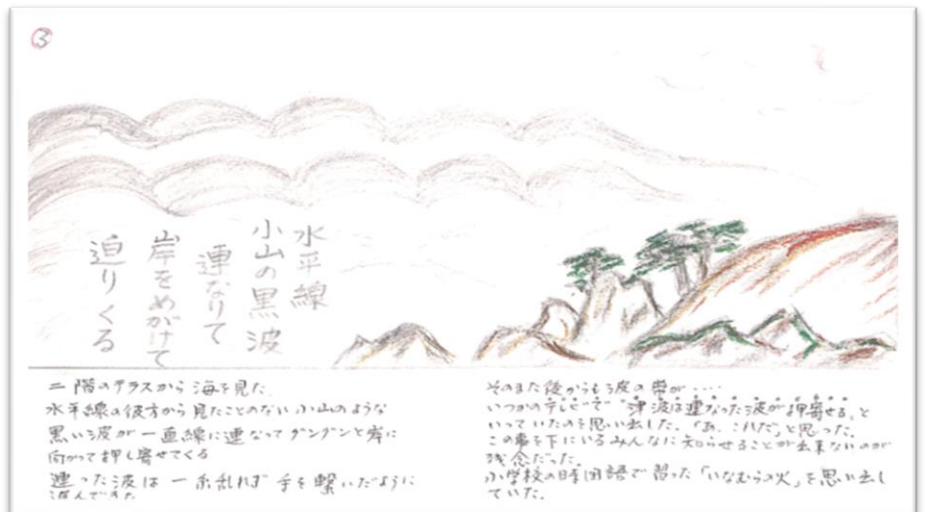
今回の津波で田老には17.3メートルの津波が襲い166人の尊い、かけがえのない命が奪われました。一人暮らしをしていた私の母は、昭和の津波を経験した母の姉と一緒に津波の襲来を自宅のベランダから、真正面から見ていました。整然と並んだ波(挿絵)が音もなく、淡々と陸に近づき、いとも簡単に防浪堤をのり越える様を見ていました。『海がゴーッとなり、あんな(お兄さん)は、セタ(雪駄)履いて逃げた。のぶゆき、「命はてんでんこ」だからな、何もはがなくてもいいから、たがい(高い)山に逃げろ!』昭和の津波を知っている祖母が常に私に言っていたことばです。今回の震災は暗い中に来襲した昭和の津波と違い、明るい中での襲来でした。様々なメディアにも映像が鮮明に残されています。しかし、またかならず来るであろう津波への備え、最大の備えは、恐ろしさを決して忘れずに、伝えていく、体験と教訓を伝えていく「ことば」ではないでしょうか。命を守ることは、ことばをつないでいくことです。



二日目にも津波注意報が出た。(3月9日)
91歳の姉は坂がきつくて途中で休んで来たというのを思い出して坂の下まで迎えに行ったが会わずに実家の近くまでいったところで避難する姉達に会った「お寺に避難する」というので*ヨシ姉のところへ寄った。
--中略-- 避難する人達は数人、のんびりムードだった。
--中略-- 家に入った時、海の大きな岩に山のよう大きな大きなしぶきが上がった。
「津波だ!!二階へ」

*母には二人姉がいて、どちらも町内に住んでいました。上の姉はお寺に避難、下の姉、田畑ヨシは母と一緒に避難。ヨシは長年「紙芝居(つなみ)」で津波の恐ろしさを伝えていました。

二階のテラスから海を見た
水平線の彼方から見たこともない小山のような黒い波が一直線に連なってグングン岸に向かって押し寄せてくる
連なった波は一条乱れず手を繋いだように進んできた。そのまた後ろから波の帯が---
いつかのテレビで“津波は連なった波が押寄せる”といていたのを思い出した。「あ、これだ」と思った。この事を下にいるみんなに知らせることが出来ないのが残念だった。
小学校の時、国語で習った*「いなむらの火」を思い出していた。



*「稲むらの火」は、小泉八雲の作品を基に作られた話で教科書に載り、防災教育として使用されていたものです。